

水中の虫たちのふしぎな世界

かるべはるき
荻部治紀（学芸員）

みなさんは「水生昆虫」と聞くと、どんな虫をイメージするでしょうか？ 溪流釣りが好きな方ならば、石の下に潜むカゲロウやカワゲラ、お子さんならば格好の良いタガメやゲンゴロウ、一般の方は今の季節だとホタルの仲間かもしれません。この他にも例を挙げると、トンボ、ヘビトンボ、ガ、トビケラ、カ、ハエの仲間、ミズスマシ、ガムシ、アメンボ、などなど、じつに多様なグループが含まれているのが水生昆虫です。

あこがれの水生昆虫

僕自身は、小学生の頃から、なぜか水生昆虫に心惹かれてしまい、子供向けの図鑑のタガメやタイコウチ、ゲンゴロウなどを眺めては、「自分で捕まえて飼ってみたい！」と痛切に思っていました。なにしろ残念なことに、生まれ育ったのが横浜の市街地だったために、周囲には水田もなく、水草の生える水路も池もなかったのも、これらの虫は完全に別世界の存在でした。少し成長して中学 3 年生になった時に、初めて友人と 2 人で子供だけの旅に出かけたのが、名古屋への遠征でした。もちろん、「普通の子供」ではなかったのも、目的は日本では名古屋周辺などごく限定された地域にしか生息しない「ヒメタイコウチ」という水生昆虫を求めたマニアックな旅でした。真夏に駅からの山道を延々と

歩いてたどり着いた産地で、実際にヒメタイコウチに出会えた喜びは、今でも忘れられません。

その後高校生、大学生となり行動範囲も知己も増えて、かつてあこがれだったタガメやゲンゴロウにも出会うことが出来ました。それぞれ、ペットショップなどで買って飼育したことはあったのですが、実際に野生の個体を生息環境の中で見るのは大違いで、その迫力は「すごい！」の一言でした。タガメが生息している水田には、抜け殻のようになったトノサマガエルの死体（タガメに内部を吸い尽くされたもの）が点々と落ちていて、タガメが「水中のギャング」などと呼ばれるのも、かつては養魚場の害虫とされていたのも納得でした。

なぜ水生昆虫がこれほど好きだったのかは（ちなみに今も大好き）わかりませんが、自分の身近になかった環境にあこがれた部分もあったのかもしれません。

絶滅の危機

残念ながら、水生昆虫は、1960 年代に始まった強力な農業の大量使用によって、全国的に激減してしまいました。その後も圃場整備による乾田化、用水路やため池の護岸や植生の排除などの影響で減少は続きました。わずかに残る良好な産地でも、最近ではブラックバスやアメリカザリガニなどの外来種の捕

食の影響を強く受けてしまい、かつては図鑑に「水辺に普通」と書かれていた種のほとんどは、ごく限られた場所にか生息しない、きわめて珍しい種類になってしまいました。

自分のあこがれだった水生昆虫の危機的状況を放置できず、この 10 年ほどは絶滅に瀕したある種を救うための保全活動に取り組んでいます。こうした活動によって、なんとか生息地を確保している種も沢山あります。しかし、状況は厳しく、減少の速度は鈍らないどころか、ますます激しくなっている印象があります。少し前ならばこうした希少種であっても広く見られた東北や九州などでも、年ごとに環境は悪化しています。もはや、希少水生昆虫を救うことは、自分のライフワークになってしまったのだろーと思いますが、これらの保全管理には、さまざまな土木作業が伴います。衰えを感じている身には、年々作業がつかなくなってきています。健全な環境さえ保たれれば、こんな苦労はしなくても良いのですが、追い詰められた彼らを救うためにもう一息がんばらねば。

ちなみに聞き取り調査の結果、「神奈川県にもタガメもゲンゴロウも普通に生息していた」という情報は得られているのですが、実際に詳しく調べてみると「タガメ」はコオイムシやタイコウチのことを指していたり、「ゲンゴロウ」もガムシのことを指していたりすることが多く、一般からの情報はそのまま鵜呑みにできない面が多く、注意が必要です。最近ではデジタルカメラなどで証拠写真を撮影される方も多くなっていますが、昔は今のうちに気軽に生物の写真を撮影する習慣もなかったのも、結局「本当に分布していたの？」という問いに答えるのは難しいのが正直なところ。こういう時に役立つのが博物館標本です。たとえば、当館に収蔵されている中山周平コレクションには、川崎市麻生区で採集された水生昆虫の貴重な標本が含まれています。タガメ、ゲンゴロウ、コガタノゲンゴロウ、ミズスマシなど、川崎市内はもちろん、県内からも絶滅してしまった種の標本が、かつては里山環境に普通に生息していたという証拠になっています。



図 1 ゲンゴロウ成虫（北野忠撮影）。



図2 自慢の庭池。希少種の系統保存場所も兼ねている。

自宅で自然観察

さて、ここで話を変えましょう。10年ほど前に自宅を建てました。正直自分にとっては家そのものにはまったくこだわりはなくて、ほとんど奥さんに任せきりだったのですが、「ある程度広い庭」はぜったいに欲しかったのです。といっても、普通の人イメージする「庭」ではなく、生き物が生活を繰り返していけるような庭、普通にみれば「空き地」か「荒れ地」です。僕の場合だと必須なのは、「池」。経験を重ねたこともあり、保全上重要な種の系統保存を兼ねて、いろいろな水生昆虫が生息できるような環境が欲しかったのです。

庭には多数の水槽の他に、400リットルのものを筆頭に4つの人工的な池を埋設しました。分厚いゴムシートを底に敷いた上を土で覆った池（3m×1mほど）も造成しました。この池には、地元の足柄平野の周辺地域にある水草（セリやガマ、ヒシ、ヒルムシロなど）や、絶滅が心配される水生昆虫（コオイムシ、モートンイトトンボなど）を導入しました。これらは数年で完全に定着し、世代を繰り返している僕の自慢の小池です。初夏の今頃は、モートンイトトンボが次々に羽化して、可憐な姿を見せてくれますし、コオイムシのお父さんが背負った卵から子供がふ化してくる様子

も見る事が出来ます。仕事で遅くなった夜も、ヘッドライトを持って池の中をのぞいていると、さまざまな生物が盛んに活動している様子が見られます。気軽に自宅で自然観察ができて、一気にストレス解消？です。こういう池は、割と簡単に作ることもできますし、水生昆虫が好きな方にはおすすめです。導入した種の他にも、アカトンボの仲間も自然に定着しました。とくにミヤマアカネは、羽化後も庭の中で成熟して世代を繰り返しています。

返しています。

さて、この夏、特別展で、かつての僕のあこがれだった水生昆虫たちが勢揃いします。タガメやゲンゴロウなどのスター昆虫から、誰も知らないような微少な種類まで、彼らの興味深い世界を紹介します。彼らの危機的な状況や、保全に関する取り組みも詳しく紹介します。今回は、生きた水生昆虫も展示する予定ですので、ぜひ彼らに会いに来て下さい。



図3 庭池で発生しているコオイムシのオス。子供がふ化する瞬間。